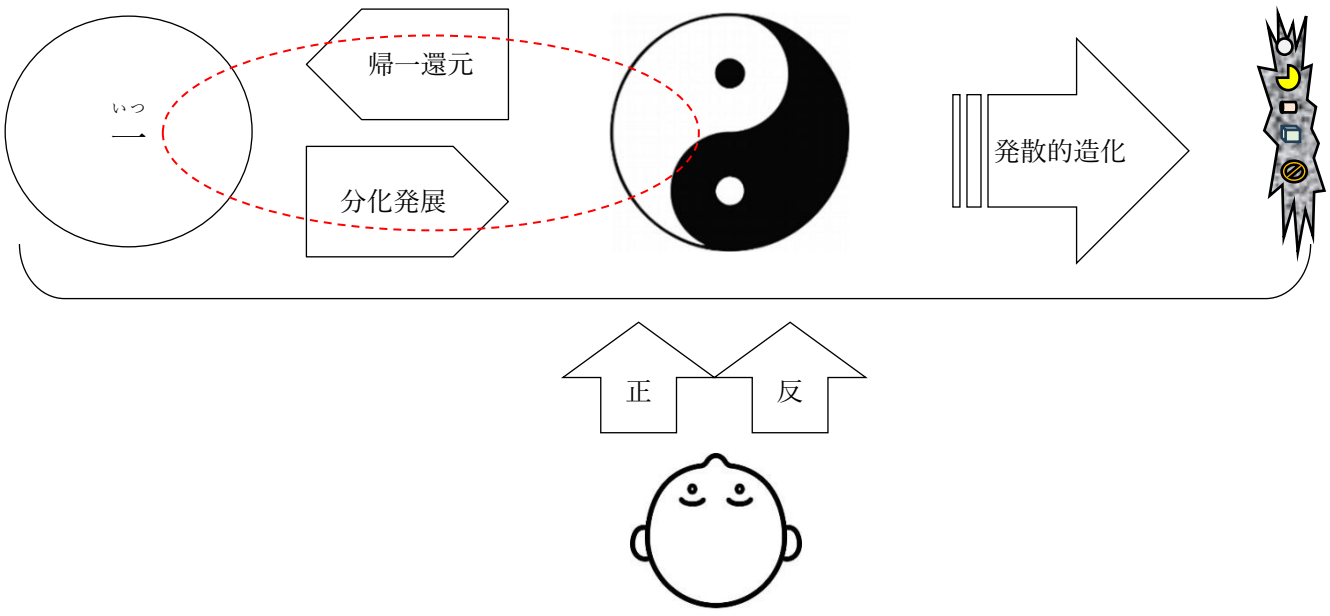
【Zigzag-memo　No007】「分別知」（自我で切り取る部分カット）と「無分別智」

切り口を変えた陰陽二元相対（待）性自然原理の発展的理解のこと。／図(表)－1

人間の普通の認識の世界は、端的に言えば、「俺がオレ我」の世界、所詮地球上 80 億人の 1 の世界である。現実世界森羅万象の対象、一つの「もの・こと」の内部に個を成らしめる境界があるとする見方を「分別知」という。　その一つの「もの・こと」の内部の境界を取り外した世界観を「無分別智」という、この世の新羅万象の本質を辿れば、天地同根、万物一体の大法則、一味一様に無差別に包まれた“　『一』（ひとつ）　＝　全一　”（純一無雑、純一無二、一色一味）に行き着く。**「一」とは陰陽和合結実の的とも言える**、逆に、複眼思考とは「もの・こと」に対して陰陽和合を以って射する姿勢・態度をいう。

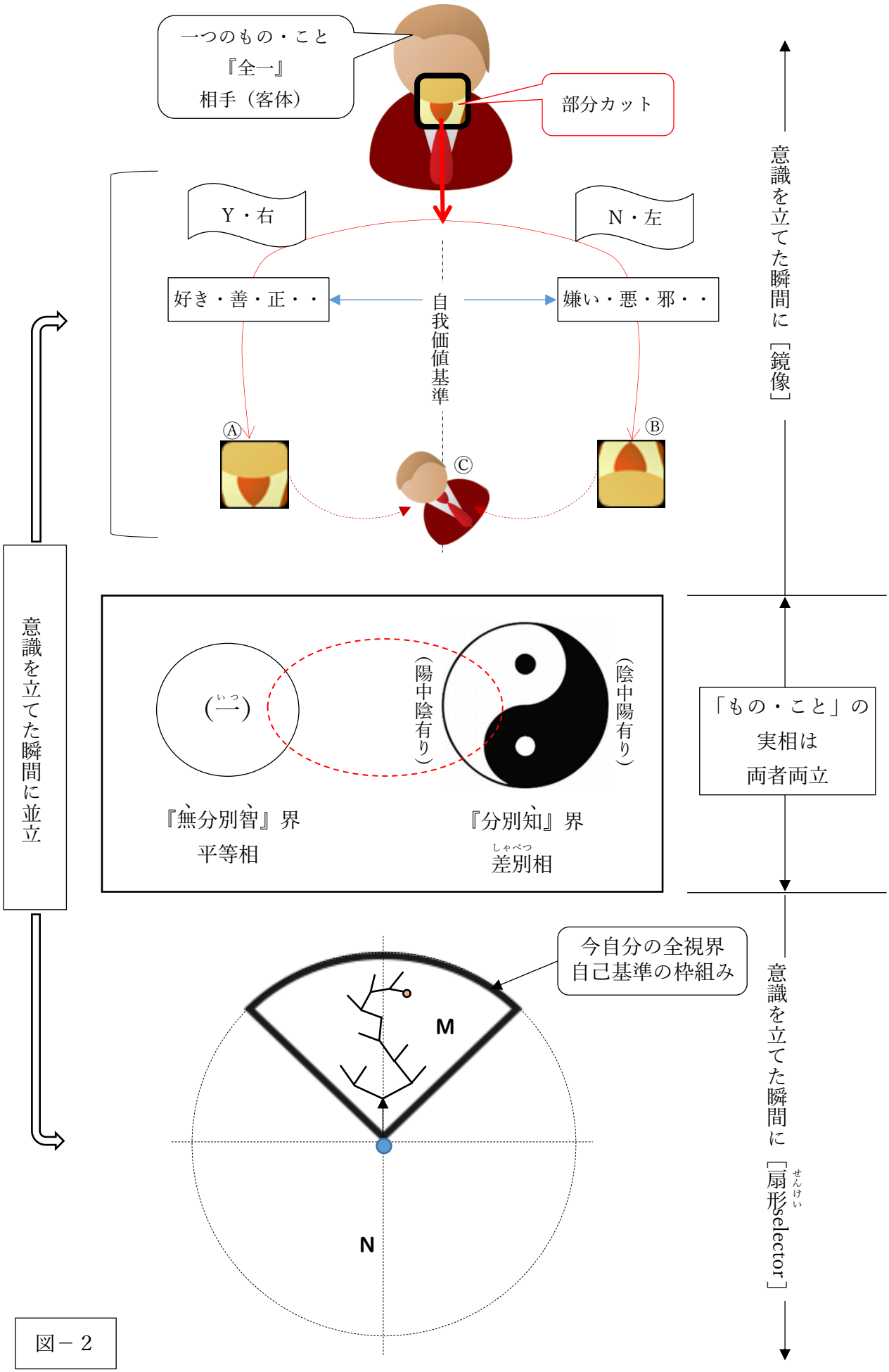
<table>
<tr><td colspan="4">現実世界森羅万象</td></tr>
<tr><td>見えない宇宙</td><td></td><td colspan="2">見える宇宙</td></tr>
<tr><td>一</td><td></td><td>陰陽二元</td><td rowspan="2">世の「もの・こと」</td></tr>
<tr><td>無分別智
無境界一元
平等相
理想郷</td><td></td><td>分別知
境界二元
差別相
現実界</td></tr>
<tr><td colspan="4"> 

複眼思考</td></tr>
</table>

図(表)－1

このような東洋哲学の意々は架空や妄想の話ではない、今や名立たる科学者や心理学者の説く処と一致する。

以上を踏まえた上で、鏡像と扇形の切り口で見てみる。図(表)－2、**人間の現実世界の認識は、対象の「部分カット」であるという大前提に立つ必要がある、「部分カット」した瞬間に「有限」という枠に嵌まったことになる。**


一つのもの・こと
『全一』
相手（客体）
部分カット
Y・右
N・左
好き・善・正・・
嫌い・悪・邪・・
自我価値基準
Ⓐ
Ⓑ
Ⓒ
意識を立てた瞬間に［鏡像］
意識を立てた瞬間に並立
(一)
(陽中陰有り)
(陰中陽有り)
『無分別智』界
平等相
『分別知』界
差別相
「もの・こと」の
実相は
両者両立
今自分の全視界
自己基準の枠組み
M
N
意識を立てた瞬間に［扇形selector］

図－２

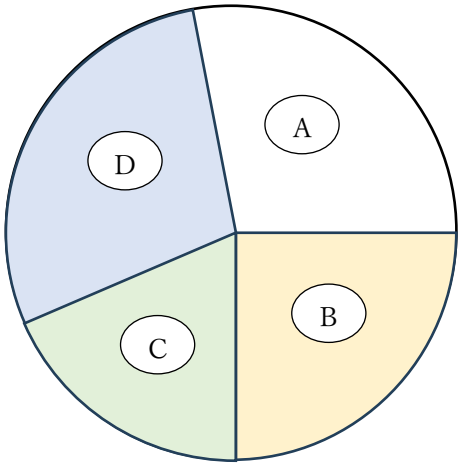
１．鏡像論の切り口

まず、認識・理解作用、言語・知識活動とは、自分（自我・主体）に唯一絶対視した価値判断基準を立て、『対象（森羅万象・万物)』に(※)十八界作用の部分カットを以って相手（他者・客体）を評価しているに過ぎないのだが、にも拘わらず、相手・この世の全部を評価すると思い上がる、実際に脳に送られる情報は部分カットした断片だが、「分別知」が邪魔し、「部分＝全体」と歪曲するのであり、いわゆる錯覚である。するとどうなるのか。『一つ・全一』から部分カットした『対象』に対し「好き・善・正・・」（Y）評価を当てようとすると、陰陽二元「陽中陰有り・陰中陽有り」の自然原理が発動し、その感情・意識に確証を得るために対抗馬（反対概念）を立てる必要があり、「嫌い・悪・邪・・」（N）が**自動発現（内発）する**。感知したカット情報と内発対抗馬を比較照合し、「好き・嫌い」という判断を下しているのだ、認識にはこのような鏡像関係が自発するのだ。言い換えると、通常の「分別知」界においては認識に鏡像関係が自生するのである。

（※）仏教語。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根と、その対象となる色・声・香・味・触・法の六境と、六根が六境を認識する眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識のことをいう。

２．扇形（三角錐）論の切り口

一人の人間が持てる可能性としての「creative-potential」（創造的潜在能力）は無限大であり、すなわち、**本当は「無分別智」を含む生き物**である、図－２最下部のように、その無量・無限を完成形とした円弧（球体）に対応させると、今世「分別知」（部分カット）で生きる**一人の人間は、枠に嵌まった有限界の扇型相当（同図のM部）になる、これを「扇形selector」（扇形に切取りする選別機）**と称する。人間の知識・知恵は分化発展して行くというもののその扇型（おおぎがた）内部での藻掻きに過ぎない、にも係らず、本人は円の中心に常在して、常時 360 度視界を得ていると錯覚しているがために「俺がオレ我」の発生原図となり、無明となり苦しむのだ。　（二次元的に円弧と扇形、三次元的に球体と三角錐）　「扇形selector」に対する別の捉え方をすると、図－２において、M部以外のN部は可能性・成長分野ということになる。ただし、M部に存在することに自己正当化・独善化の心地良さを癖付けている人は、N部を排除することがあれ、そこは可能性・創造性の海という捉え方は出来ないのである。**人間は今の自分の視界を全方位と思うが、実は自己基準の枠組みに固執しているに過ぎないのだ。**　（図－３）、この構造を直視し、「無分別智」のエネルギーを取り込むべく意識的な努力が必要となる。すなわち、**切り取った扇形以外の隙間部を埋める必要があり、そのためには、個人で言えば切り取る扇形の方向をＡ⇒Ｄのように満遍なく変えて行く、すなわち、考え方の向きを自ら変化することだ。　集団で言えば様々な価値観を持つ「よそ者・若者・バカ者」ごちゃ混ぜから生み出されるパワー**に期待するのがハイコスパの近道であろう。



図－３

この一例を挙げる。「私は四国霊場順礼歩きへんろを４回行った」と書き喋った。88 か寺を一回（一度）で一巡した行いを別々の年に４度（４回)、したがって、４巡したものであるが、何人かから、88 か寺を１巡するために４回（４度）行ったと受け止められた。こちらの意図が 100%相手にそのまま通じるとは限らない、まさに、受け止めの違いは「扇形selector」の性・投影なのである。こんなことは日常茶飯事のことであり枚挙に暇が無い。

３．分別は主観

もの・ことを陰陽二元観想に基づき相対比較することは、そもそも、主観であり、一時的であり、一面的な判断であり、総合的・全体的・客観的な判断ではない。

４．この宇宙に存在する全ての「もの・こと」、その一切みなは、宇宙の大生命すなわち「究極の根源」（言葉・言語を以って表現出来ない混沌・霊妙な世界、無あるいは無限の世界）からの顕現であり、言い換えると、「無分別智（一）」とは、「地球上 80 億人の頭脳＋宇宙」の世界、個を成らしめる境界が無い（Non）とする“『一』（ひとつ）”の世界は至純の理想界である。このように考えて来ると、私には、**現実的な自分は有限値であるとする『分別知（陰陽二元）』の種子（核）と、『無分別智（一）』の種子（核）と、両核が共に内在しているのだと気が付く。　森羅万象みなに具有する両面同時両立である。**～華厳の理事無碍法界の見方に通底する。

このような過程は別テーブルで並べて一々熟慮する、あるいは会議で決めるようなものではない、深層無意識層の中で瞬時に脳波レベルで行われる。なぜなのか、もう一つの見えない宇宙『一』（全一、華厳界 ZPF）があるからだ、よって、**あらゆる「もの・こと」（森羅万象、万物）は、陰陽二元対極概念が分離不可分のペアとなって並立しているのである。**～華厳の事事無碍法界の見方に通底する。　したがって、「聞く耳持たずの俺がオレ我」と頑張った処で無駄・無意味というものだ、【Zigzag-memo　No002】図(表)－４中、陰陽の特徴の病的な側面が暴れたものに過ぎないのだ。

私が敬慕・私淑する安岡正篤先生の力を借りると、**我々が意識するというのは「無限なるものを有限化し、全きものを部分化し、永遠なるものを限定化」すること**なのだという、非常に分かり易い。したがって、私がここにどんな立派なことを書いたとしても、世の「もの・こと」の有限化・部分化・限定化の何ものでもない、これは地球上 80 億人に通じること。私の人間性は「扇形selector」なのだということは、別の見方をすれば、360 度円弧完成形まで伸び代がある、成長の可能性があるということである。

老荘思想に曰く「道は、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」を根本源義とした『分別知（陰陽二元)』と、『無分別智（一)』のことを学ぶと、これまでの私に染み付いた先入観・固定観念でいいのかという自省が自ずと湧いて来る、“現状維持は退化である”という言葉もある、一生一度の人生歩みを止めてはならないとつくづく感じるようになった。

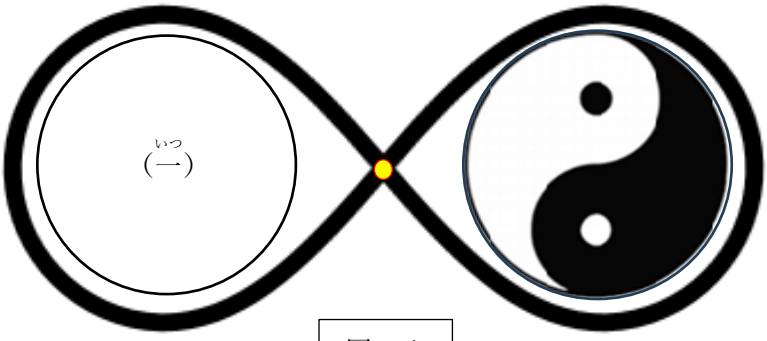
****

以上合わせて、私個人の心は図－4のとおりの「一極二元の三律構造ワンセットは「Moving oval man（動的楕円形人）」である、結び目に立つ私は「一と二の境界点」に居ることでもなる。日々日常の心・言・行は同図「Moving oval man」活動で無体化され量子（種子）化された先の ZPF（見えない吾がコスモス）に沈殿して行くのだ、今度は逆に ZPF に沈殿した種子（量子）が同図「Moving oval man」活動で有体化されて、日常の心・言・行になるのだ。一面（表）は明瞭な二元の視点、同時に一面（裏）は二元陰陽和合射的の視点を意識している。

次に集団との関係について広げて考察する。

発展的に個人（私）と集団（貴方）との関係性を考えると、双極楕円構造の図－5が浮かぶ。いわば、

安定的な状態をイメージした均衡調和の望ましい姿である。

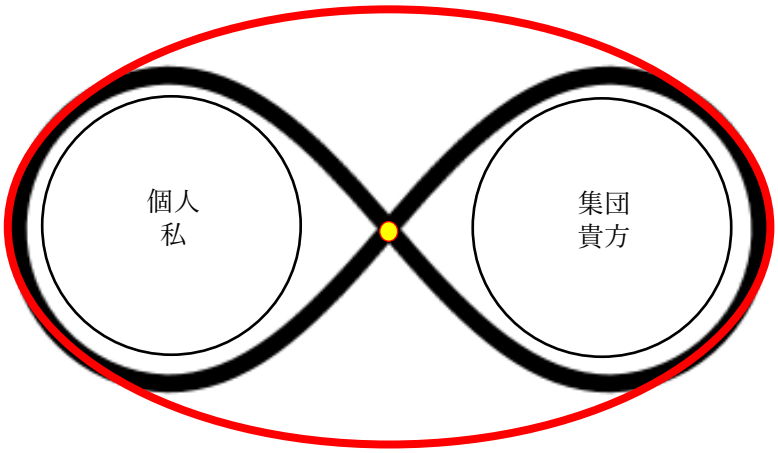


図－4

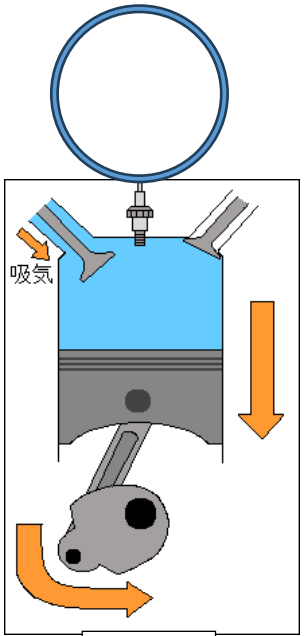
はたまた二つのエンジン構造が浮かんだ。

普通のレシプロエンジン構造は図－6（http://pitgarage.jp.land.to/car）のとおりであり、格別応用するものは無い。

他方で、特殊なロータリーエンジン構造は図－7 a （https://www.excite.co.jp/news/article/Webcartop）のとおりであるが、同図 b のように「多極性変形楕円形」まで想像が膨らんだ。例えば、ⒶⒷⒸの３人でグループを組んだ場合、求心点がその人数だけ存在するかのように振る舞いつつも全体調和が取れている状態を比喩するものである。一人ひとりが、個人と集団が、集団と集団がロータリーエンジンと同価で有りたいものである。

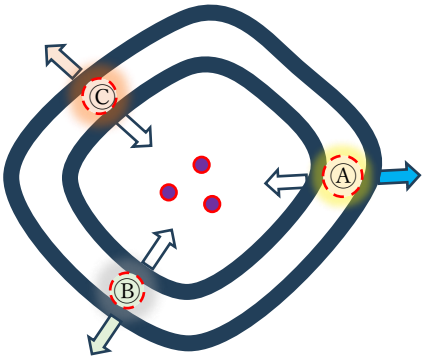


図－5



図－6

図－7 a



図－7 b

(end)